スポーツ系サークルにおける組織文化マネジメント
-稲穂キッカーズを事例として-

Research on organizational culture management in sports circle：a case study of INAHO KICKERS

1K10C145　木村 紀彦
主査 作野 誠一 先生　　副査 松岡 宏高 先生

【研究背景】

大学生の大半がアルバイト、サークル、体育会などの何かしらのコミュニティに属し、大学生活を過ごしている。 このうち特に「サークル」という組織は我々大学生の多くが所属し、それまで所属してきた強制力を持った組織と異なる組織である。サークルは絶対的な命令系統を持たず、メンバーそれぞれがその組織を造り上げていくという色が強い。また、個人の自由意思に従い参加・脱退ができる点も他の組織と大きく異なる点であると言えよう。上述した通り、サークル活動は大学生の中心活動のひとつとして挙げられる。しかし、参加者が多い割にそのマネジメント方法については、これまでほとんど研究で取り上げられていない。

【研究目的】

本研究の目的は以下の 2 点である。

目的 1：組織文化をマネジメントしていくリーダーに注目し、サークル組織の理想のリーダーシップの方法について明らかにすること

目的 2：スポーツ系サークルにおける効果的な組織文化マネジメントの方法を明らかにすること

【研究方法】

本研究では、主に文献研究と調査対象となるサークル組織、稲穂キッカーズの歴代幹事長 5 名への面接調査を合わせて行う。文献研究では、理想的な組織文化のマネジメント方法や、それを行うためのリーダーシップの方法について追究する。その後、それを念頭に置きつつ、調査対象者への面接を通じて成功事例や問題点等を明らかにするという手順で研究を進める。

【文献研究】

文献研究では、組織について理解し、サークル組織の特徴を把握、組織文化の構成要素やリーダーシップの類型などを明らかにした。また、本研究で用いた各定義も文献研究から検討したものである。文献研究で明らかになったことに関しては、面接調査の際の質問項目作成にあたっても取り上げた。

【面接調査】

筆者が所属する早稲田大学のサッカーサークル、稲穂キッカーズの歴代幹事長 5 名への面接を行う。5 名は 1995 年度、2010 年度、2011 年度、2012 年度、2013 年度の幹事長を務めている。面接対象者には、①リーダーシップについて、②組織の成立条件について、③組織文化の変遷についての 3 つの視点から計 11 の質問を行った。

【考察】

1995 年度は体育会寄りの組織であったため、リーダーシップの取り方などに他の年度との差がみられた。基本的には、サークル組織の特徴である「構成員主体の運営」という点に関しての理解はあり、そこに働きかけるマネジメント方法をしていることが明らかになった。

組織文化の変遷を追った結果、大幅な変革はなかった。1 年間という短い期間で組織文化の変革や創造にリスクを負えないというものであった。一方、練習方法などには、毎年何かしらの変革があることがわかった。三冠制覇という組織の目標が達成されていないことから、現状を変えていくために組織文化の変革が行われることが推察される。構成員の組織への満足度も組織文化の変革や想像のタイミングを計る指標になり得るといえるだろう。

【結論】

目的 1：サークル組織の理想のリーダーシップの方法に関しては、以下のとおりである。

・支援型リーダーシップを行い、構成員の自主性を促す
・構成員同士のコミュニケーションを作り出す
・構成員とフラットな関係を常に意識する
・重要事項の決定の構成員の同意を必ずもらう
・フォロワーにとって信頼性のある行動をする

目的 2：スポーツ系サークルにおける効果的な組織文化マネジメントの方法に関しては、以下の通りである。

・入会時に簡単に辞めることのないように伝える
・入会後に個人の目的と組織の共有価値をすり合わせていく
・象徴・他の組織との際立ちには必ず共感してもらい入会してもらう
・リーダーの任期が短期間（1 年程）の場合、組織文化の変革・創造はマイナーチェンジに留める